かあらん、おかしと見るほどに、郭公をいとなめくうたふ聲ぞ心うき、ほと、ぎすよ、をれよ、かや。つよ、をれなきてぞ、われは田にたつとうたふに、略○下

〔枕草子春曙抄十〕ほと、ぎすよ略○中　是なめくうたふうた也、をれよは日本紀に己の字ををれとよめり、かやつは源氏玉葛にすやつばらとあり、宇治拾遺にくやつといへるにおなじ、世俗にきやつといふ詞也、をれなきてぞとは、己鳴て也、

〔宇治拾遺物語五〕家綱かたすみにかくれて、きやつにかなしうはかられぬるこそとて、中たがひて、目も見あはせずしてすぐるほどに、略○下

〔源氏物語二十玉鬘二〕おとゞも、しぶ〳〵におはしげなることは、よからぬ女などもあまたあひしりて侍を、きこしめしうとむなゝり、さりともすやつばらを、ひとしなみにはし侍りなんや、略○下

〔狂言記一〕ゑぼしおり

大名やい、そこなやつ、それがしをば、ちやうちやくをしおるか、

〔狂言記二〕瓜盗人

まつひら御ゆるされませ、私は盗人ではござりませぬ、こなたのはたけが、あまり見事に、瓜がなりましたと承りまして、見物に參りました、

〔書言字考節用集四人倫〕足下（ソソクナタカタ）酉陽雜俎、秦漢以來通類相呼言二足下一、詳二紀原一、其方（ソナタ）

〔倭訓栞中編十二〕そなた　其方なり、のか反な也、神代口訣に汝をよめり、こは他に對しいふなり

〔續狂言記一〕すみぬり女

シテ　そなたのなげきは尤じや、去ながら國へくだつたらば、追付迎をのぼすであらふ、

〔源氏物語二帚木〕そこにこそおほくつどへ給ふらめ、すこしみばや、さてなんこのづしも、心よくひらくべきとのたまへば、略○下